

—序— 文—

今回、「転換期の社会へ向って一人間の時間の復権と社会創造」が、長崎大学公開講座叢書4として刊行される運びとなりました。

幸いにして同じ叢書3の「長崎から“いのち”を考える」は、読者の方々から好評を以て迎えられましたが、今回もそのようにあって欲しいと願っています。本書は主に2つの部分と特論から成り立っていますが、ある意味ではそれぞれ独立した内容ながら、広い意味から見れば“創造の営み”の点で共通した基盤を持つものと言えましょう。

I部の「時間の科学」では、哲学、文学、歴史学、経済学、地学、物理学、統計学等の多角的視野から、時間の持つ原理や意義、その価値を求めて行こうとする試みがなされています。とかく現代社会に住む私たちは、日常の慌しさの中にいつしか埋没し、時の流れに身を委ねる受け身の姿勢に陥りやすいものです。そうした私たちであるからこそ、時には静かに立ち止って本書に示されるような時間の多面性を改めて認識し、その中から自らの時間帯を創造するように積極的に努めることもまた必要なのではないのでしょうか。

II部の「現代社会の創造主体」においては、子ども、女性、高齢者、農民、漁民、患者といった時代によっては一種の弱者の立場に置かれやすい人々の視点から、社会や医療創造の在り方を探ろうとする試みがなされています。

執筆者はいずれも教育学、国語学、海洋社会科学、医学の専門家であり、現代社会の創造主体を上記の各層に据えて総合的に、しかも個々の具体例にもとづいて論じた初の研究と言えます。

また特論は国際化のうねりの中で、留学生教育を通じて大学がいかに関係社会に対処しようとしているかを、長崎大学での実践を引きつつ述べられています。現代の日本において留学生教育に対する外的条件の整備が緊急事であることはもちろん、同時にまた大学独自の創造努力が不可欠なことを示唆する内容となっています。

最後に、本書の企画にあたられた大学教育開放運営委員会ならびに執筆下さった教官各位に深く感謝いたします。

平成4年4月

長崎大学長 土山秀夫